テーマ：エリスと豊太郎は愛し合っていなかった。

はじめになぜ僕がこのテーマに設定したかという、人間はそんなに簡単に愛し合えるのかと疑問に思うからだ。まして、日本人とドイツ人が短時間で恋に落ちるのかと思う。文化も違えば、貧富の差もある二人がそう簡単に愛し合えるというのは考えられないので、このテーマにした。僕は結論として、二人は出会った当初は多少の恋愛感情をお互い持っていたものの、エリスが発狂して豊太郎と別れる瞬間には、真の愛は存在していなかったということを書きたいと思う。

まずは、エリスが豊太郎を愛していなかったということについて考える。エリスはただ豊太郎を愛していなかっただけでなく、経済目的で豊太郎と関係を深めていったのではないかと疑う。豊太郎と出会ったとき「家に一銭の貯へだになし。」と言っているようにもともとエリスは経済面での援助を求めていたのである。そして豊太郎に対して、「我を救ひたまへ。金をば薄き給金を割きて返しまいらせん。よしや我が身は食はずとも。それもならずは母の言葉に。」と言っている。このときは、本当にお金が必要でエリスに恋愛感情はなかった。が、肝心なのはその後である。「人に否とは言はせぬ媚態あり。」と豊太郎は感じていて、豊太郎はこの目遣いは知っていてするのか、知らないでするのかと考えている。僕はエリスは知っていてするのだと思う。その根拠は、豊太郎に向けたエリスの言葉である。「我をばゆめな捨てたまひそ。」「よもあだし名をば名乗らせたまひじ。」このような言葉は、豊太郎を切り離したくない、切り離させるものかというエリスの内面の表われだと思う。心から愛しているのであれば、「まさか別の姓を名乗らせたりはなさらないでしょうね。」の「まさか」を付け足して言うだろうか。このようなエリスの性格からして、あの目遣いは自分でわかってやっているのだと思う。そしてそのような計算高い女が、金目的で始まった関係に恋愛感情を持つことは不可能だと思う。

また妊娠がわかってから木綿やレエスを用意したのも、さらに豊太郎との関係を絶対的なものにして将来の経済面での安定を図ろうとしたのである。エリスがパラノイアにかかったのも、これからは一生経済的に安定した生活を送れるという妄想を抱いていて、それが叶わないとわかってショックを受けたのが原因で生じたのである。また、豊太郎が免官になった際、「母にはこのことを言わないでください。」と言ったが、これが豊太郎に言うべき言葉であろうか。普通ならば豊太郎の進退についてもっと心配するはずだ。しかし、エリスは父も死んで母にも脅かされ豊太郎以外に頼れる人物がいなかったため、無職になっても豊太郎を見捨てることができなかったのである。豊太郎は国の代表としてドイツに来るほど賢いから、無職になっても後々出世できるだろうという見込みもエリスにはあったはずだ。なので、経済目的として無職の豊太郎と関係を続けるのも不思議ではない。さらに豊太郎に対する手紙で、「(自分の)日本への旅費くらいならどうにでもなるでしょう。」と書いてあるが、心から豊太郎を愛してついでにいききたいならば、「働いて何とかお金

を集めてあなたについていきます。」くらいのことは書くはずだ。以上のことからエリスの豊太郎に対する愛は感じられないのである。

次に豊太郎のエリスに対する愛についてだが、豊太郎もエリスを愛していたとは言いがたい。エリスと出会って間もない頃は、「私たち二人の間には、まだほんの子供じみた楽しみがあっただけなのに。」と述べているように、エリスに対する純粋な愛情があったことは読み取れないこともない。しかし、それは徐々に薄くなっていく。相沢にエリスとの関係を断てと言われた後、豊太郎は「捨てがたきはエリスが愛。」と、述べているが、これはエリスへの愛ではなくエリスからの愛であることから、豊太郎はエリスからの愛を断ち切りたくても断ち切れないことがわかる。また、エリスが妊娠したかも知れないときに、妊娠が「もし本当ならばどうしよう。」と考えている。心から愛していれば、エリスの妊娠を素直に喜ぶはずである。おそらくエリスの手紙に表れているように、豊太郎はエリスの自分を束縛しようとする言動に嫌気がさしたのだ。断りたくても、いいえと言えないのが豊太郎の性格であるから、エリスの言うがままに振り回されてストレスを感じ、愛が薄れていったのだ。

以上のことから、二人は出会った当初は愛し合っていたとしても、お互い共に時間を過ごす中で、結局は真の愛は消えてしまったと考える。

参考 携帯サイト [maihime](#)